

天明三年田山曆の蛇足庵本版と岩手県博本版の違いについて

瀬川 修

岩手県立博物館 020-0120 盛岡市上田字松屋敷34 Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0120, Japan.

1 はじめに

田山曆は江戸時代に南部領田山村（現、岩手県八幡平市）で作られていた曆である。文字を使わず、絵と記号で記されていたため、絵曆といわれている。盛岡城下でも別の絵曆（盛岡曆）が作られていたので、あわせて南部絵曆という。

本論で取り上げる天明三年田山曆は現存最古の田山曆とされ、岩手県立博物館が個人から寄贈を受けた1点のみの存在が確認されていた。しかし、平成24年（2012）、たばこと塩の博物館（東京都渋谷区）において開催された展覧会「江戸の判じ絵～再びこれを判じてごろうじろ～」(会期：平成24年9月15日～11月4日)で、同年の田山曆が展示公開された。

この田山曆の展示公開は衝撃的なものであった。当館が所蔵する田山曆と一部異なっていたからである。そのひとつが味噌玉の記載である。当初、所蔵者である蛇足庵氏はこの絵を疑問に思い、南部絵曆の研究者である工藤紘一氏（盛岡市、岩手県立博物館研究協力員）に尋ねた。工藤氏はこの絵をすぐに味噌玉と判定し、問題はこの絵の意味は何かということになった。結論からいえば、「味噌作りよし」という意味であるが、今度はなぜ2種類の田山曆が作られたのかという疑問にぶつかったのである。

このように、平成24年は田山曆の関係者にとっては味噌玉に沸いた1年であった。岩手県立博物館は蛇足庵氏からこの田山曆を借り受け、平成25年2月26日から3月31日までの会期でトピック展「新発見！もうひとつの天明三年田山曆」を開催した。この田山曆にとっては初のお里帰りが実現したわけである。また、曆研究の第一人者である岡田芳朗氏の特別講演会を会期中の3月20日に開催し、同氏のこの田山曆に関する見解も伺うことができた。

このような経緯のもとに、本論では二つの天明三年田山曆について考察してみたい。

2 田山曆

まず、最初に田山曆の歴史について簡単に述べたい。

田山曆は冒頭で述べたように、八幡平市の旧田山村で作られていた。版元は八幡家といい、先代の八幡秀男氏は田山曆の保存と普及に努めた人であった。所蔵している資料のうち、嘉永二年田山曆と木活版木85点は岩手県指定有形民俗文化財である。昭和の曆と江戸時代の曆の模刻を作ったようであるが、それはあくまで記念であって、田山曆は江戸時代または明治初期で途絶えたのである。現存最後と思われる曆に明治九年田山曆があるが、ここでは触れない^(註1)。

江戸時代の田山曆で現存するものは次の9点である。

- ①天明3年（1783）、②天明7年（1787）、③享和2年（1802）、④文化13年（1816）、⑤天保6年（1835）、⑥天保11年（1840）、⑦天保15年（1844）、⑧嘉永2年（1849）、⑨安政7年（1860）

現存する曆は明治九年田山曆を含めても10点で、真に貴重な曆だといわねばならない。

なお、他に写真・模写及び記述など実物ではないが、安永4年（1775）、寛政12年（1800）、天保4年（1833）、天保10年（1839）、万延2年（1861）の田山曆が知られている。天保4年を除き、断片もあるが、その内容を見ることができる。安永四年田山曆は江戸時代の写しであるが、天明3年より古く、最古である^(註2)。

伝承では、田山曆は善八という人物が考案したとされる。天明三年田山曆には末尾に「田山善八」の署名が残る。この善八が考案した人物と同一であるかはわからないが、伝承によると善八が田山に移り住んだとされるのが元禄とも正徳ともいわれるので、後の時代の人と思われる。伝承によると、善八は3代続いたという^(註3)。曆に善八の署名があるものは、この曆の他に天明七年田山曆だけである。当時凶作が続いたので、農民を救うため、農作業の目安として、この曆を考案したといわれている。このような伝承に属することがらは、江戸時代に最初に田山曆を紹介した橋南谿の『東

遊記』にも見え、内容的には一致する。

また、文字を使わずに絵で表したものに絵心経がある。これも田山と盛岡があるのだが、田山絵心経は正徳年間(1711～1716)に遡るといふ伝承があり、田山曆を生みだす下地となったといわれている。

3 天明三年田山曆(癸卯1783年、岩手県博本版)

現存最古の田山曆である。橘南谿『東遊記』によってその存在は知られていたが、実物の曆が発見されたのは昭和30年代になってからのことである。この時の事情については岡田芳朗『南部絵曆を読む』に詳しい。

天明三年田山曆の特徴についてまとめると次のようになる。

(1) 年号について

この曆には年号に当たる部分がない。十二支で年を表し、この年は卯年であることが絵によってわかる。田山曆は年号の記載がなく、年号が記されるのは天保十五年田山曆からである^(註4)。おそらく盛岡曆の影響を受けたと考えられる。なお、この曆が天明3年と判別する方法は紙面の都合でここではふれない。工藤紘一氏か岡田芳朗氏の参考文献を参照されたい。

(2) 曆注について

天明三年田山曆岩手県博本版に記載された曆注は、庚申、節分、八専のはじめ、己巳、初午(初甲申)^(註5)、十方暮れの入り、月食、彼岸の入り、社日、土用の入り、初壬辰、種まきよし、八十八夜、田植えよし、入梅、半夏生、三伏、地火、二百十日、刈り入れよし、冬至、寒の入りの22種類である。

庚申や己巳のような干支によるものは月頭(上段)に配され、次に節分、入梅、彼岸の入りのような二十四節気と雑節が配され(中段)、下段には八専や十方暮れといった日の吉凶を示す曆注が配される。これは一般の略曆と同じ配置で、田山曆といえども略曆を踏襲しているといえる。

また、庚申・己巳のようにすべて記載されているものと刈り入れよし・地火のように選択的に一部が記載されているものがある。

月別にみると、曆注は平等に記載されているわけではない。曆注の極端に少ない月は1月である。わずかに3件(庚申・節分・八専のはじめ)である。他には、4、5、11月が少ない。1月は正月であるので、行事は多いはずである。特に小正月は農家にとって、大切な行事が多いはずであるが、記載がないのはおそらく年

によって移動することがないからであろう。

(3) 署名について

末尾に「田山善八」という署名がある。また、天明七年田山曆(寒川神社蔵)の末尾には「田山村善八」の署名がある。署名があるのは、この2点だけである。

4 蛇足庵本版と岩手県博本版との違い

では、次に蛇足庵本版が岩手県博本版とどのような違いが見られるか、またそれはなぜなのかを考察してみる。

まず、蛇足庵本版が岩手県博本版と大きく違っている点は次の5点である。

- (1) 蛇足庵本版は節分を欠く。
- (2) 蛇足庵本版には春分・秋分がある。
- (3) 蛇足庵本版には味噌玉がある。
- (4) 蛇足庵本版には地火が多い。
- (5) 蛇足庵本版は和紙が薄い。

これらの点について、ひとつひとつ考察してみよう。

(1) 蛇足庵本版は節分を欠く。

節分は立春の前日である。鬼やらいの習俗が民間で盛んであったのだろう。田山曆では立春ではなく、節分を記載している。これが蛇足庵本版にはない。したがって、1月の行事は2つだけで、空欄が多く非常にものさびしい作りになっている。

節分を欠く理由は何であろうか。1月は行事が少ないうえに、年頭の行事を忘れるとは考えにくい。

工藤紘一氏は、前年である天明2年の田山曆を写したのではないかという。天明二年田山曆は実存しないが、あったとすれば1月に節分はない。その前年天明1年はいわゆる年内立春で、12月に立春があった。したがって、天明2年の1月には立春がない。この天明2年の田山曆を写したために、立春を書き忘れたというのである。筆者も同感で、これ以外に合理的な理由が見つからないのである。ただし、そのためには次のような作り方をしなければならない。

まず、天明2年の田山曆を見ながら、月ごとの行事を書き写していく。次に日にちは略曆を見なければわからないので、おそらく伊勢曆を見ながら、日にちを入れていく。最初から伊勢曆を見て作っていったのであれば、立春を見逃すことはないであろう。判を押した人が曆に不慣れだったか、あるいは急いで、たくさんの曆を作ろうとしたために、前年の曆に節分がない

ことに気づかなかったのである。

なお、行事によっては月が移動する場合があるので、最初に行事を記入するという前提は確かなものではない。田山暦は年によって月内の暦注の位置が変わり、盛岡暦のように定位置に配置されない。

(2) 蛇足庵本版には春分・秋分がある。

春分・秋分は他に天明7年(1787)、享和2年(1802)、文化13年(1816)にのみ見られる特異な暦注である。春秋の彼岸の入りはすべての田山暦に見られるため、暦注としては彼岸の入りが本筋なのであろう。春分・秋分というのは二十四節気であるが、節分と同じように民俗行事としては彼岸の入りの方が適していたと考えられる。

また、春分については位置も不自然で、本来は下段ではなく、中段に配すべき事項である。その点秋分の位置のほうがよい。しかし、秋分が入ったためか8月の暦注が混み合っている。岩手県博本版は秋分がないこともあって、整然としている。

なお、この春分・秋分については奇妙なことがある。前述の橋南谿著『東遊記』に天明三年田山暦が図で紹介されている。橋南谿が旅したのは天明6年のことで、天明3年の暦を写すということ自体もおかしいが、その内容にはもっと驚く。『東遊記』の天明三年田山暦には春分・秋分が描かれているのである。岩手県博本版を見て描いたのであれば、これはないはずである。蛇足庵本版を見て描いたのであれば、春分・秋分はあるが、節分がないはずである。また、味噌玉が描かれているはずである。つまり、どちらを見て描いてもおかしいのである。もう1種類、天明三年田山暦があるのではないだろうか。

(3) 蛇足庵本版には味噌玉がある。

これが蛇足庵本版の最大の特徴である。味噌玉は他の現存の田山暦には見られない暦注である。当初、味噌玉の意味がよくわからなかったが、岡田芳朗氏や工藤紘一氏の研究によって、味噌玉の意味が明らかになった。それは「味噌作りよし」というものである。伊勢暦には「みそつくりよし」「みそすつくりよし」「みそさけつくりよし」の3種類の記載があり、それを味噌玉で表しているのである。

暦に「味噌作りよし」を入れる必要が生じた理由は何であろうか。それは、酒造りなど醸造がさかんな地域に暦を配る必要が生じたためであろう。田山暦は配り暦であったから、そのような事情が生じたことは十

分考えられる。しかし、それならば最初から味噌玉を入れておけばよく、2種類の田山暦を作る必要がない。ここに、工藤紘一氏がいうように、蛇足庵本版は試作か版行前のものであろうという説が出てくる。この点については後に述べる。

(4) 蛇足庵本版には地火が多い。

地火とは地火日といい、土地に働きかけることに凶である日をいう。柱立て、井戸堀り、種まき、埋葬などは禁忌とされる。天明三年田山暦では、鋤の絵に「ち」と書き、着色(朱)している。後に、判を押すようになり、「ち」の文字が消え、墨で塗りつぶされるようになる。「ち」の文字がなくても、鋤の方向で地面を指すことによって、わかるからであろう。

地火は蛇足庵本版には17回記載される。岩手県博本版にはわずか2回なので、差は歴然である。一方で、岩手県博本版では「種まきよし」が8回もあり、多すぎるのが疑問のひとつであった。11月にもあることから、この時期の種まきとは何であろうかといった疑問まで出ていた。地火は「種まきよし」と対になっていると考えられるのに、岩手県博本版の2回は、これもまた少なすぎるのが疑問であった。蛇足庵本版は多すぎ、岩手県博本版は少なすぎるのである。これが不自然なところである。

これも味噌玉同様、必要に応じて多く記載されたのであろう。天明年間は飢饉の多い時期であったので、伝承のように農事の時を知るために多く記載されたと考えられる。そのときに「種まきよし」のような積極的な暦注を記載するのではなく、禁忌を戒める方を採用したのかもしれない。

(5) 蛇足庵本版は和紙が薄い

これは実物を見なければわかりにくいことだが、蛇足庵本版の紙がやや薄い。写真では見分けることが難しいが、手にとって見るとその違いは明らかである。もし、岩手県博本版と同時に作ったのであれば、紙質も同じはずである。これもまた、試作説を裏付ける証拠となる。紙が薄いのは版行用ではないと考えられるからである。

5 考察

このように、蛇足庵本との違いを比べてみると、当初は味噌玉が不思議でならなかったが、やがて節分を欠くという方がむしろ不思議になってくる。この暦の成立を解くかぎは節分ではないかと思えてくる。

岩手県博本版には節分は記されている。したがって、岩手県博本版は節分がなかった前年のものを写すというような方法をとっていないのは明らかである。あるいは、前年の暦を写すことはあったとしても、注意深く写し、略暦で校閲しているといえよう。

蛇足庵本版は節分を欠くのであるから、岩手県博本版をもとにしていないことは明らかである。これらがお互い関係していると考えれば、順序としては蛇足庵本版が先で岩手県博本版は後になる。

工藤絃一氏は蛇足庵本版を試作か推敲原稿の最終版であろうと考えた^(註6)。蛇足庵本の紙が薄いのも試作と考えれば、説明がつく。忘れられた節分が加えられ、地火や種まきよしなどの暦注が調整された。その結果、たとえば蛇足庵本版では過密だった8月の暦注が、岩手県博本版では整理された(写真4、6)。しかし、整理されなくてもよいと思われる10月や11月の地火は消えて、空欄となっている(写真5、6)。この説明がつかない。

また、試作に彩色するだろうかという疑問となぜ市中に出たのかという疑問がある。試作であれば、版元の八幡家が所有していたであろう。絵暦などを「めくらもの」と称して、愛好し研究していた佐藤勝郎氏などの私家版『南部めくらものシリーズ』を読んでも、味噌玉のことがまったく記されていない。おそらく存在すら知らなかったのではないか。だから、我々も驚いたのである。

盛岡暦では特別な暦が作られることがあった。嘉永7年農作物図絵付(1854)と嘉永8年年齢早見表付(1855)である。このようなことを考えると、蛇足庵本版と岩手県博本版の二つの暦は別々に作られたという考えも成り立つと思われる。絵も判も同じなのだから、別の版元ということではない。田山暦は天明三年に限っては2種類作られた。それは前述のように、醸造に関係があるだろう。「みそつくりよし」「みそすつくりよし」「みそさけつくりよし」という伊勢暦の暦注を必要とする人がいたのではないだろうか。一方、地火の多さは当時の冷害に対する恐れを表れではないだろうか。

二つの天明三年田山暦については、このような仮説も成り立つと思われるのである。

もし、蛇足庵本版が試作であるとすれば、この1点しか存在しないであろう。初版あるいは別版として版行されたのであれば、今後実物あるいは何らかの記録

が発見される可能性がある。なにしろ、工藤絃一氏が昭和60年に論文を発表した時には現存田山暦はわずか5点だけであった。現在では10点の実物が確認できるのである。このことは工藤氏がいちばん実感されていることであり、また望んでいることでもあろう。

また、『東遊記』記載の田山暦を考えると、さらにもう1種類があるのではないかということは前述のとおりである。

謝辞

最初に書いたように、もう一つの天明三年田山暦の発見は感動的なできごとであった。展覧会を開催し、公開していただいた蛇足庵初代矛盾氏には改めて敬意を表したい。また、当館においてトピック展として公開できたことはたいへんな喜びである。重ねて御礼申し上げます。

ご教示・ご指導いただいた矢萩昭二氏(当時、八幡平市博物館長)、工藤絃一氏、岡田芳朗氏の各氏に厚く感謝申し上げます。工藤氏、岡田氏ともに同じ年に最新著を発表された。その中でお二人とももう一つの田山暦の存在を予言していたようである。

註

- 1 工藤絃一著『新発見の田山暦-「天明七年田山暦」と「明治九年田山暦」-』(『岩手県立博物館研究報告第23号所収』)の報告がある。この暦は、田山暦が明治13年まで作られたという伝承があり、それを裏付ける資料であるという。ただし、この暦は冒頭にあるべき諸神の方位が末尾に記載されるなど検討が必要である。
- 2 工藤絃一著『田山暦・盛岡暦を読む』及び岡田芳朗著『南部絵暦を読む』に詳しい。
- 3 故八幡秀男氏によると、善八・善八・善八・祐八・祐次郎・寅次郎・源夫・秀男と続いたという。(佐藤勝郎『南部めくらものシリーズ第八集』)
- 4 万延二年暦に至っては、漢字で「万延」と記されている。実物はなく、写しである。
- 5 初午について、本論の主旨から外れるが、補足したい。初午とは2月の最初の午の日で、事典には稲荷を参拝する日と説明されている。岩手県博本版にも蛇足庵本版にもこの暦注はあるのだが、日にちがおかしい。最初の午の日であるからには、遅くとも12日までになければならない。ところが、天明三年暦にはどちらも2月23日とされている。工藤絃一氏はこの初午を長

い間おかしいと思ひ続け、日にちの誤りとして説明してきたという（『田山暦・盛岡暦を読む』）。

一方で、岡田芳朗氏はこれを「甲申」という行事であるといい、かつて馬に関係する地元の信仰があった日ではないかという（『南部絵暦を読む』）。確かに、このおかしな初午の日は、天明三年以降享和二年まではすべて「甲申」である。それ以降は、初めての午の日と変わっている。

岡田氏は申の日を馬の絵で表すのは、たとえば「猿曳き駒」図絵馬のように、古くから陰陽五行で猿と馬が深い関係にあるからであると前掲書で説明する。筆者はさらに猿の絵はすでに「庚申」で使われ、関係のある馬の絵にせざるをえなかったと考えている。

工藤氏は岩手県の民俗信仰を調べ、これに最も近いのは厩猿の信仰であるという（『もう一つの「天明三年田山暦」民具マンスリー第46巻3号』）。厩猿は厩に猿の頭蓋骨を祀る信仰で、前述の陰陽五行に関係がある。最近まで、岩手県内にはないとされてきたが、岩手県内にもこの信仰があったことが確認されている。これならば、馬の絵を使う理由は大いにある。

当初筆者は、田山暦は官暦を写したもので、暦注自体に独自性はないと考えていた。しかし、これは誤りであった。この地方独特の行事に初壬辰（絵柄は辰）がある。この日は火伏せの日であるが、盛岡暦にはない。しかし、県内にこの行事は広くあったと思われ、現在でもその名残が見られる。筆者はてっきり初壬辰は全国的にあるものだと思っていたのである。

こうしてみると岡田氏のいうように、当地にはかつて「甲申」の日があり、初午の人気とともに暦注から姿を消したのではないかという説は有力である。

- 6 たばこと塩の博物館展覧会図録『江戸の判じ絵～再びこれを判じてごろうじろ～』に談話として、掲載のちに『もうひとつの「天明三年田山暦」』（『民具マンスリー第46巻3号』所収）として文章化して発表された。

参考文献

- 岩手県立博物館『南部絵暦』（執筆工藤絃一）、1983年3月
内田正男『日本暦日原典』雄山閣、1985年4月

岡田芳朗『南部絵暦を読む』あじあブックス、大修館書店、2004年12月

岡田芳朗『新出天明三年田山暦について』八幡平市博物館研究紀要第3号、2013年3月

岡田芳朗・阿久根末忠『現代こよみ読み解き事典』柏書房、1993年3月

工藤絃一『田山暦・盛岡暦を読む』熊谷印刷出版部、2004年1月

工藤絃一『新発見の田山暦—「天明七年田山暦」と「明治九年田山暦」』岩手県立博物館研究報告第23号所収、2006年3月

工藤絃一『もうひとつの「天明三年田山暦」』『民具マンスリー第46巻3号』所収、神奈川大学日本常民文化研究所、2013年6月

佐藤勝郎『南部めぐらものシリーズ第八集 田山暦(1) 解説篇 第2版増補』私家版、1972年9月

瀬川 修「新発見！天明三年田山暦の謎」『岩手県立博物館だより』第137号所収、2013年6月

橋南谿『東遊記後篇 1』

たばこと塩の博物館 展覧会図録『江戸の判じ絵～再びこれを判じてごろうじろ～』（執筆 岩崎均史）、2012年9月

要旨

新しく天明三年田山暦が発見され、これを蛇足庵本版という。旧来の同年暦は岩手県博本版という。蛇足庵本版の特徴は(1) 節分がない(2) 春分・秋分がある(3) 味噌玉がある(4) 地火が多い(5) 紙が薄いである。このうち新出の味噌玉は「味噌(酒・酢)つくりよし」を表すことがわかった。しかし、同年暦が2種類存在する理由はわかっていない。工藤絃一氏は試作説を発表されたが、複数版説も考える余地があると思われ、本論で提起した。

二つの天明三年田山暦の成立を考えるうえで、むしろ蛇足庵本版の特徴(1)、(2)が重要な手掛かりであると思われる。その結果、さらにもうひとつの天明三年田山暦の存在が予想される。

キーワード：天明三年田山暦、蛇足庵本版、岩手県博本版、味噌玉

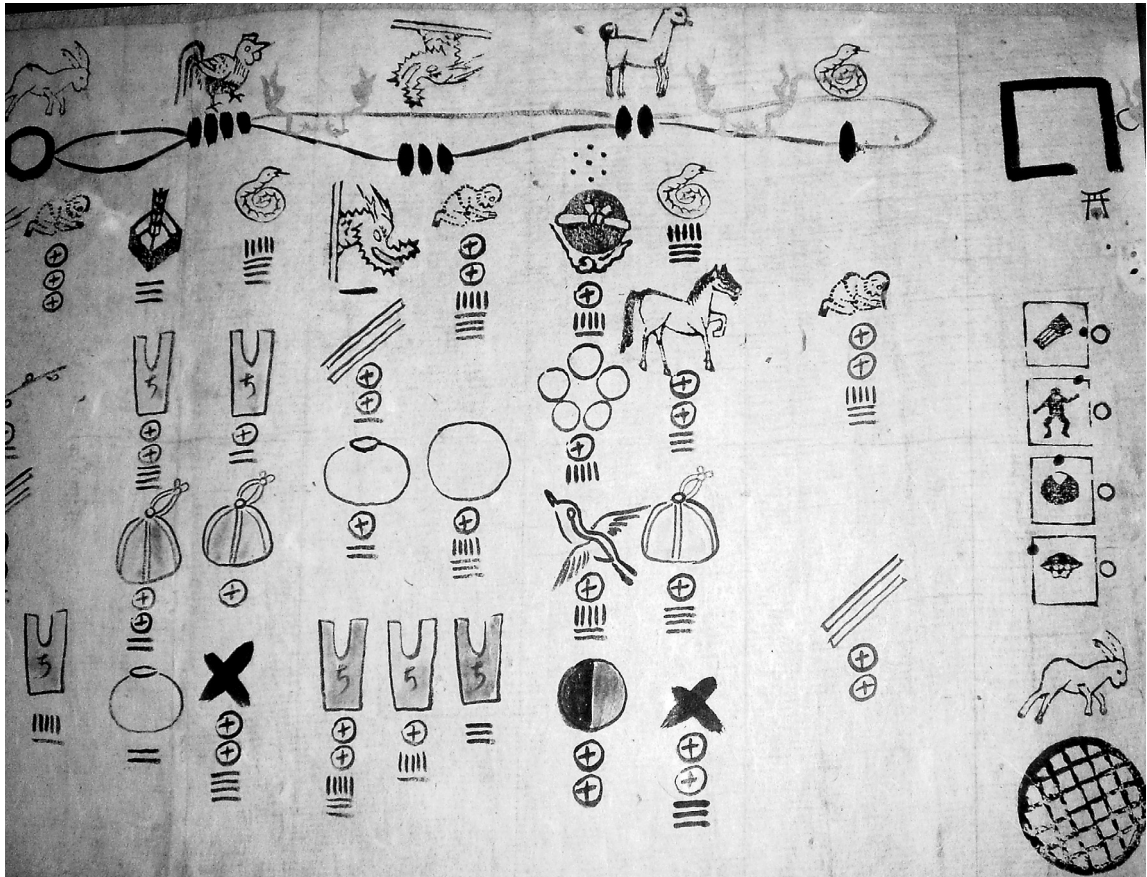


写真1 天明三年田山曆蛇足庵本版（蛇足庵氏蔵） 曆首 縦26.4cm、横89.6cm、紙本著色、1783年。
中央、鳥の絵の右が味噌玉。2折目（最初の味噌玉の右の空白）に鬼の絵（節分）がない。

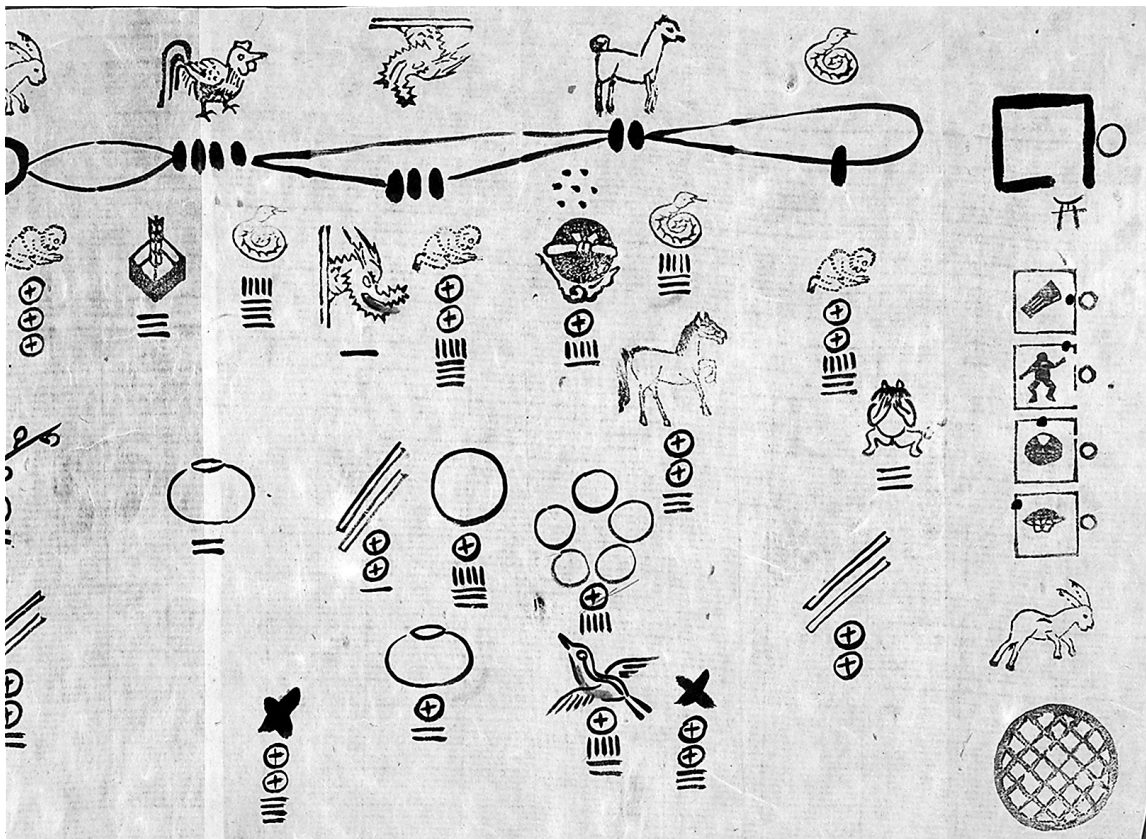


写真2 天明三年田山曆岩手県博本版（岩手県立博物館蔵） 曆首 縦26.4cm、横90.6cm、紙本著色、
1783年。右から2折目、泣く鬼の絵が節分。

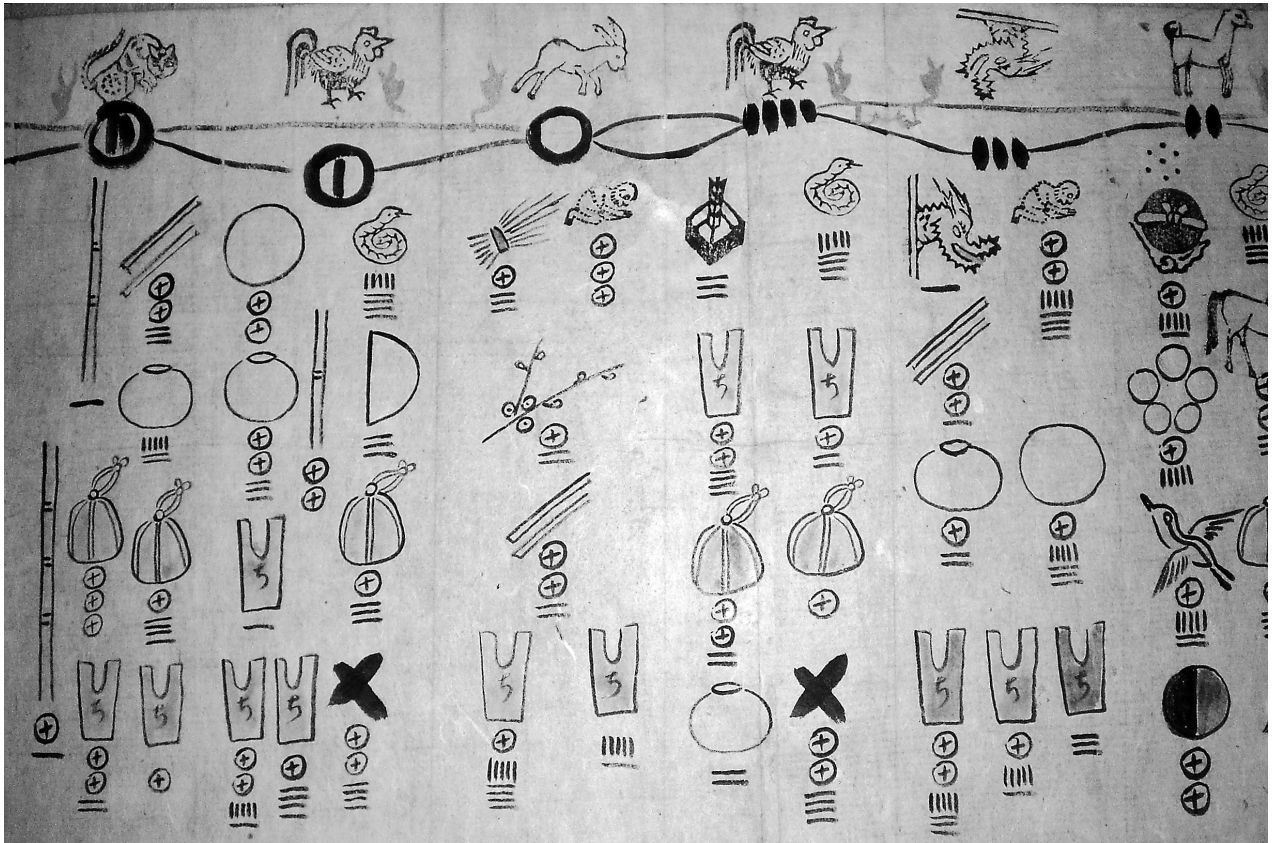


写真3 同蛇足庵本版 部分 3月から7月。右列、5つの丸が彼岸の入り、黒と朱塗りの片身の円が春分（鳥絵の下）。

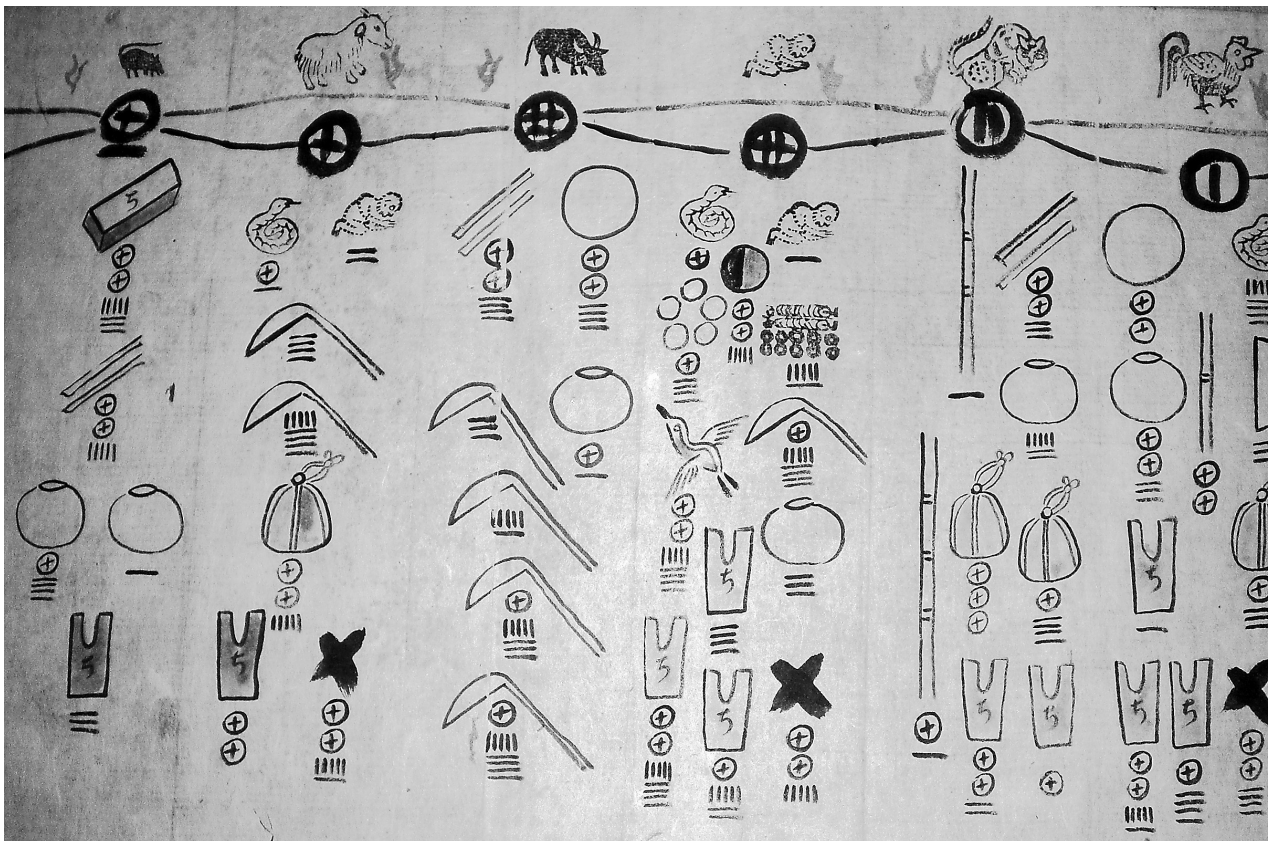


写真4 同蛇足庵本版 部分 7月から11月。中央上部、黒と朱塗りの片身の円が秋分（蛇絵の下）。

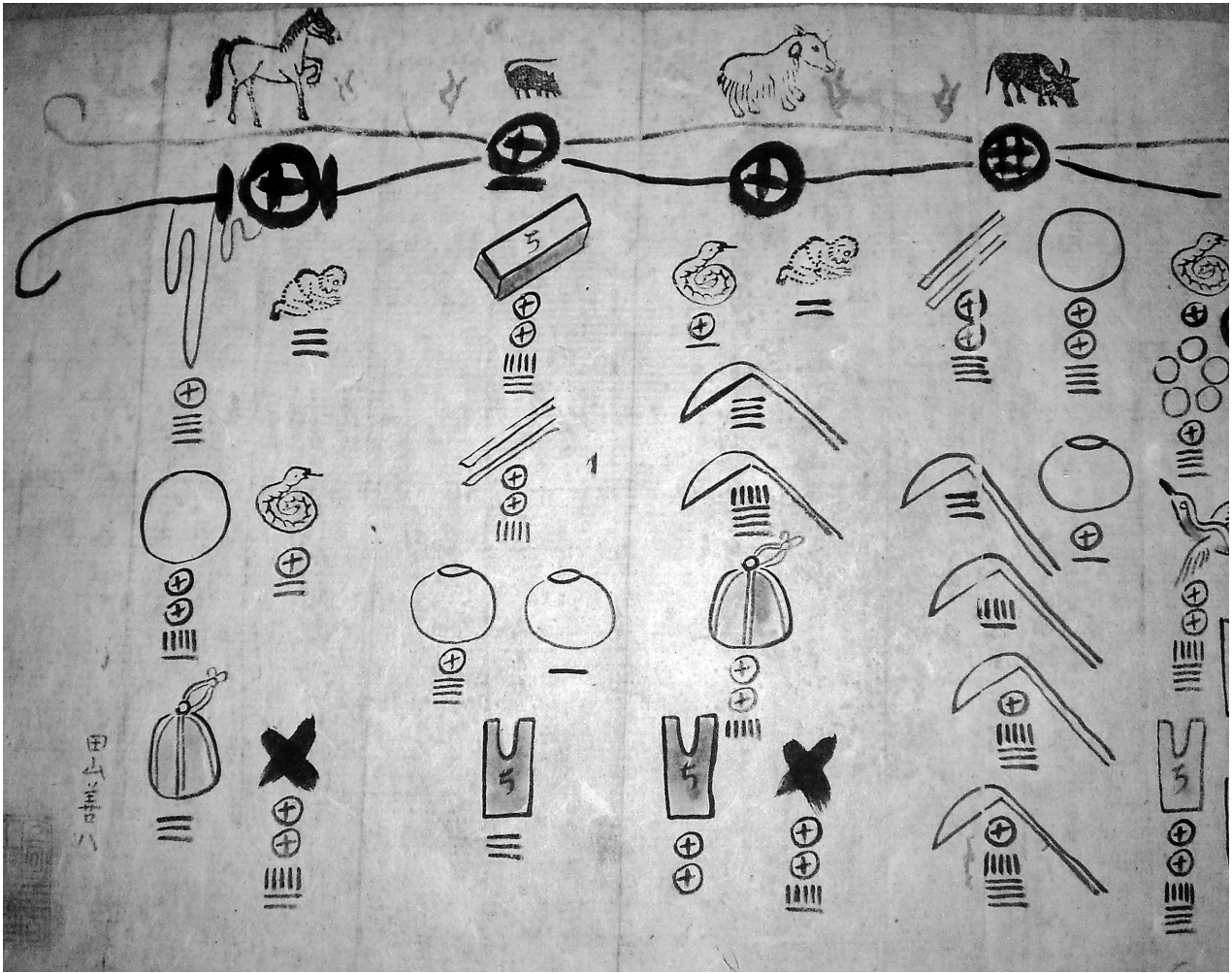


写真5 同蛇足庵本版 部分 9月から12月。署名（朱印は旧所有者の蔵書印と思われ、オリジナルではない。）

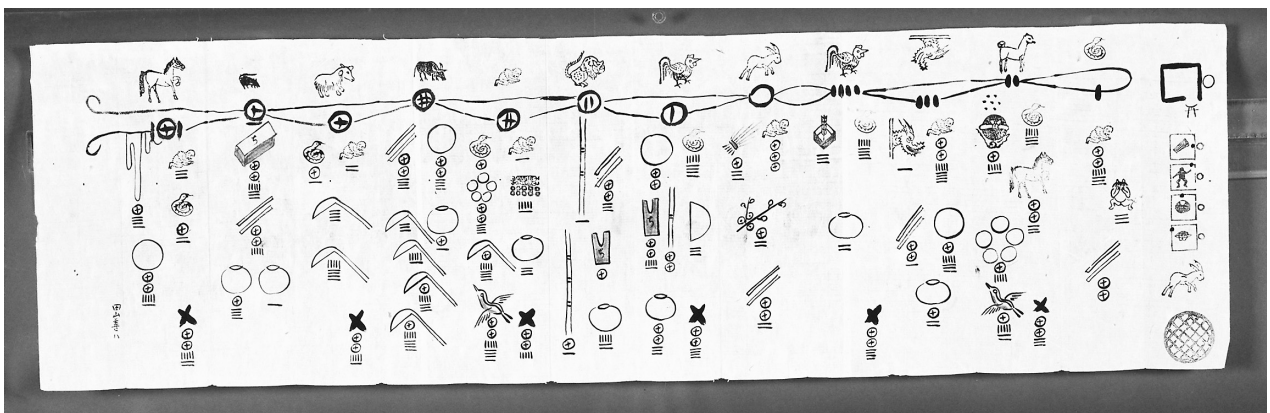


写真6 同岩手県博本版 全体図